

## „Germanistik Kyoto“ 執筆要領

### 1. 原稿について

- (1) 電子ファイルを、日本独文学会京都支部宛て（メールアドレス [kyoto@jgg.jp](mailto:kyoto@jgg.jp)）に送付して下さい。
- (2) 掲載論文の校正は、誤植の訂正以外は不可とします。

#### 1.1. 日本語の場合

- (1) A4版の用紙に左右上下とも3cmの余白をとり、40字×30行（横書き）で書いて下さい（本文・註の合計で17枚以内）。
- (2) 段落の書き出しは1字下げして下さい。
- (3) 句読点には「、」と「。」を使用して下さい。なお、句読点も全角扱いとします。
- (4) 文中の欧文は原則として半角扱いとし、欧文を使用する箇所の前後は半角以上空けて下さい。
- (5) 作品名・雑誌名には原則として『 』、引用文には「 」を使用して下さい。ドイツ語の引用文には原則として „ “ を使用して下さい。
- (6) 用字用語は、原則として常用漢字・新仮名遣いを使用して下さい。また、一般に用いられていない表現・文字は使用しないで下さい。
- (7) 論文に添付するドイツ語のレジюмеについては、次項1.2の規定を適用します。なお、枚数は1枚以内とします。

#### 1.2. ドイツ語の場合

- (1) A4版の用紙に左右上下とも3cmの余白をとり、約80ストローク×30行で書いて下さい（本文・註の合計で17枚以内）。
- (2) 段落の打ち始めは、3字下げして下さい。
- (3) イタリック体を使用する場合には、当該文字に赤で下線を引いて下さい。ボールド体を使用する場合には、当該文字に赤で波線を引いて下さい。
- (4) レジюмеは不要とします。

### 2. 註について

- (1) 註は後註とし、本文の末尾にまとめて記載して下さい。
- (2) 註には通し番号を付し、本文中の該当箇所の右肩にアラビア数字と半括弧で表記して下さい。また、註が文全体にかかわるときは、句点などの後ろにつけて下さい。

(例) …。」<sup>1)</sup> …、<sup>2)</sup>

### 3. 文献の記載様式 (例)

#### (1) 独立の文献の場合

岩崎英二郎：ドイツ語不変化詞の用例 (大学書林) 1968.

Helbig, Gerhard: Geschichte der neueren Sprachwissenschaft. Leipzig (VEB Bibliographisches Institut) 1970.

(欧文文献では、括弧内の出版社名は省略可)

#### (2) 雑誌論文の場合

早川東三：「決定度」から見た後域における語順について (『ドイツ文学』57号、1976)

Klein, Wolfgang: Textverständlichkeit — Textverstehen. In: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik. Heft 55 (1984), S. 7-9.

### 4. 図版について

図版を使用する場合には、その分だけ枚数を減らし、本文・註・図版の合計で17枚以内として下さい。